

写真家の
村越としやさんと
みんなでつくる

昭和村写真展

記録集



令和4年度アートによる新生ふくしま交流事業
アートで広げる子どもの未来プロジェクト
福島芸術計画 2022

写真家の
村越としやさんと
みんなで作る
日沼ホコホコ写真展

令和4年度 アートによる新生ふくしま交流事業
アートで広げる子どもの未来プロジェクト
福島芸術計画 2022

アートで広げる子どもの未来プロジェクトは
福島の未来を担う子どもたちに、将来「新生ふくしま」
を推進する人材として活躍してもらうため、多彩なア
ートプログラムを体験できるワークショップを実施するこ
とで心豊かな成長を支援します。

昭和村を撮ってみたら美しすぎた件

「写真家の村越さんと

みんなでつくる昭和村写真展」

経過報告

令和4年度の事業は昭和村を開催地に、小中高生を対象に実施しました。講師には須賀川市にご実家があり、土地に積み重なった時間の厚みを捉える重厚な風景写真で定評のある写真家の村越としやさんをお迎えしました。企画段階から村越さんと打ち合わせを重ね、単なる撮影会、展示会に終わらない、撮影・鑑賞・展示を組み合わせたワークショップを目指しました。

ワークショップ

第1回目

「写された東北・会津」

10月16日 日曜日

13:30 - 15:00

道の駅からむし織の里しょうわ

講師 村越としや（写真家）
大里 正樹（福島県立博物館）



わずかに色づき始めた峠道のブナ林を抜けるとそこは昭和村。道の駅からむし織の里しょうわを会場に、この日は写真を「見る」時間。スマホで気軽に「撮る」のに比べ、今の私たちは一枚の写真をじっくり「見る」ことが少ないのではないのでしょうか。福島県立博物館が所蔵する千葉禎介さん、小島一郎さん、芳賀日出男さん、田附勝さんの写真※1と田島町（現・南会津町）に移り住み奥会津の暮らしや風景を撮り続けた小滝清次郎さん※2の写真パネルをイーゼルに展示し、そこに写し撮られたものをじっくり見ることにしました。

この日は、村越さんの他に福島県立博物館の民俗分野担当大里正樹学芸員が加わり、写真を見ながらの解説は大いに盛り上がりました。美術作品でもあり、民俗資料ともなる写真の豊かさ、楽しさを満喫できました。

※1 2011年の東日本大震災後、国際交流基金が企画、実施した写真展「東北 風土・ひと・暮らし」は震災と東京電力福島第一原子力発電所事故の被災地としての東北ではなく、本来の東北の特徴、魅力を海外に伝える9人1組123点の作品からなる海外巡回展でした。同展の巡回終了後、2021年にそれらの写真が同基金から福島県立博物館に寄贈されました。千葉禎介さん、小島一郎さん、芳賀日出男さん、田附勝さんの写真も含まれています。

※2 小滝清次郎さんは、1927年会津坂下町生まれ。奥会津の山々を愛し田島町（現・南会津町）に移住。洋品店経営のかたわら、登山家・アマチュア写真家として会津各地の山と村々を歩き、膨大な数の写真を残しました。2022年没。



ワークショップ
第2回目

「私が写真を撮る理由」 & 作品講評会

11月5日 土曜日
10:00 - 12:30
道の駅からむし織の里しょうわ
講師 村越としや



すっかり葉を落とした林の中、燃えるように赤い紅葉に目を奪われながら、今回も道の駅からむし織りの里しょうわに向かいます。今日は村越さんから写真家の道を進んだわけ、ご自分の写真についてお話をお聞きします。

進路を決める時期にある中学生、高校生に聞いて欲しかったのですが、学校行事と重なってしまい参加者は小学生と大人になってしまったのは残念でした。

村越さんのお話をお聞きする会場に村越さんの作品をイーゼルで立て並べ、道の駅の一室が村越さんの個展会場になりました。参加者のみなさんはとても熱心に耳を傾けていました。

お話しをお聞きした後、この日までに集まった参加者のみなさんの写真を村越さんに見ていただきました。どの写真も美しい。撮影者の腕前もさることながら昭和村の美しさをあらためて実感しました。これは選べないと、全作品を展示することに決定。参加してくれた小学生と展示方法を相談しました。





ワークショップ参加のみなさんが撮影した

私の好きな、
気になる昭和村



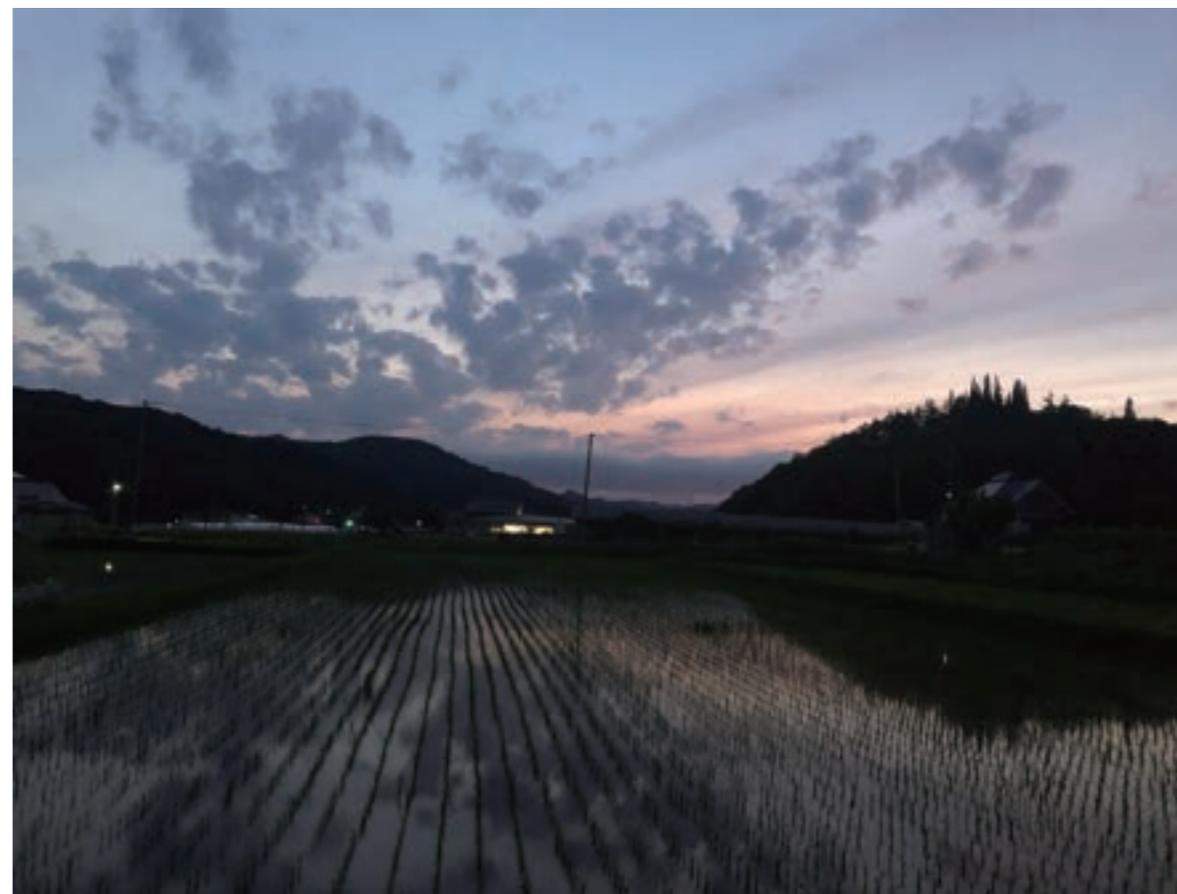
大芦管理センター1
五十嵐 広華



大芦管理センター2
五十嵐 広華



冬の朝日
工 珠瑠



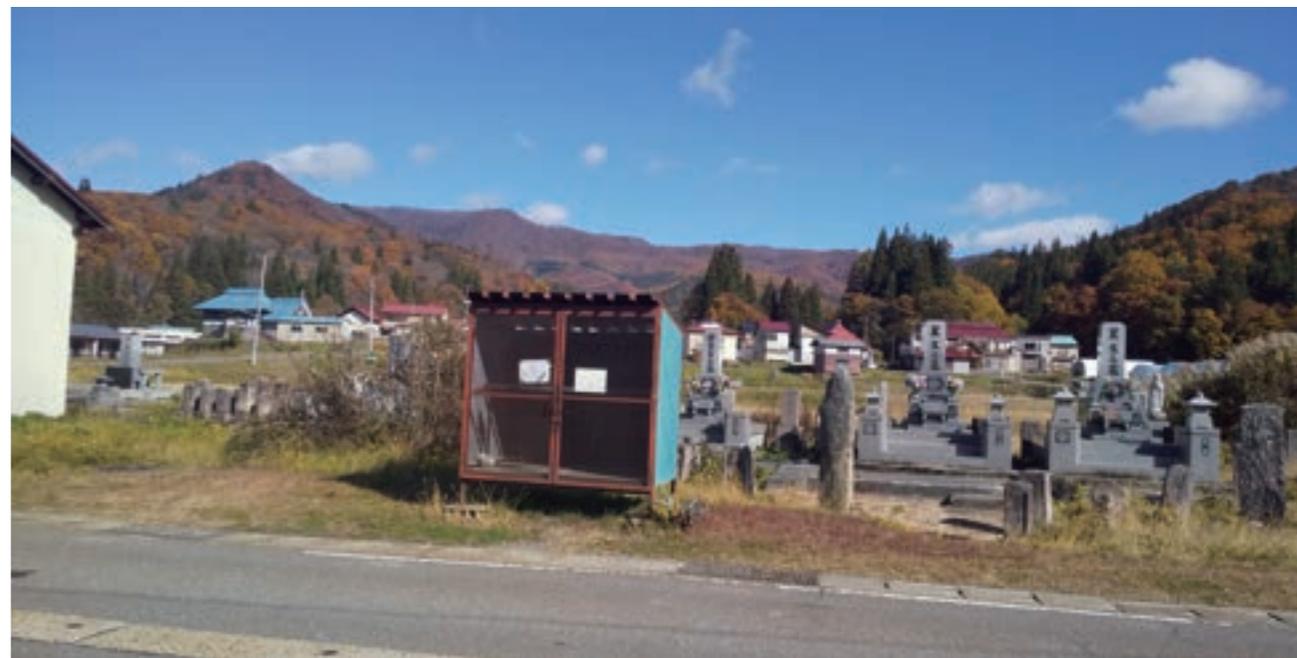
春限定の鏡
工 珠瑠



盛夏の村
工 珠瑠



昭和1
工 朋瑛





いつもの通学路
工 遊理



昭和の朝日
工 遊理



落ち葉目線
酒井 夏海



秋のトンネル
酒井 夏海



農道 1
酒井 夏海



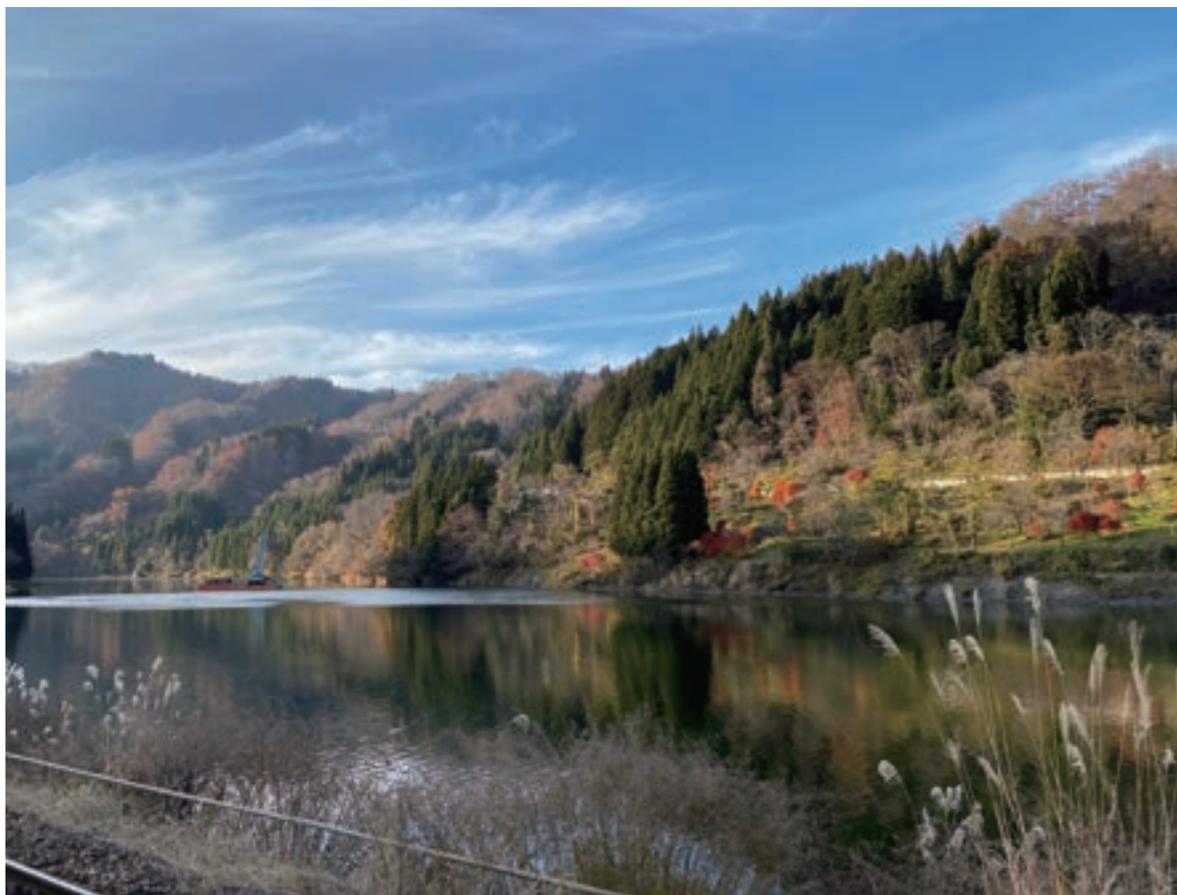
農道 2
酒井 夏海



収穫後
酒井 夏海



秋の木
酒井 夏海



秋の只見川1
菅家 菜々美



秋の只見川2
菅家 菜々美

ワークショップ

第3回目

「昭和村写真展」をつくろう

11月26日 土曜日

10:00 - 12:30

交流・観光拠点施設 喰丸小

講師 村越としや

奥会津の早い紅葉が終わり銀杏の黄色い絨毯も鮮やかさを失い始めた初冬の昭和村喰丸小学校。黄色に燃え立つ銀杏の輝きに引かれた観光客の賑わいも去り、この日の校舎はひっそりしています。

前回のワークショップで決めた「A3サイズで余白を大きくプリント」の通りに昭和村の写真館「シゲルスタジオ」で出力してもらった写真を教室に並べます。お互いの写真を初めて見た参加者の表情はマスクで伺えませんが、視線の強さで興味津々の様子が伝わってきます。やはりいい写真ばかり。これには講師の村越さんも嬉しそう。

村越さん撮り下ろしの昭和村の写真を含め、参

加者のみなさんの写真をじっくり鑑賞してから展示作業を始めます。段ボールやクリスマスオーナメントに加え、カスミソウや枯れ枝、枯れ草を使って自分の写真、友達の写真にフレームを付けるように飾っていきます。

次に飾られた十人十色の写真を展示します。大きな壁面にどう配置するか。互いの写真の位置を気遣いながらレイアウトを考える仲よし女子や兄弟。堂々とイーゼルを使う小さな巨匠。段ボールの表面を剥がし素材感を際立たせた創造性あふれる台紙、もりもりのデコレーション、持参した流木と組み合わせる斬新なアイデアも。各所に昭和村特産のカスミソウがあしらわれた教室は賑やかで暖かい空間になりました。残った写真は村越さんと福島県立博物館学芸員が展示。作業が終わる頃には冬の柔らかな日差しが教室に差し込んでいました。





「こういう写真ワークショップを福島県全市町村でやったらいいのに。」という村越さんの言葉に意を強くしました。

参加者のみなさま、お疲れ様でした。すてきな写真をありがとうございました。これからも、「いいね」のためではなく、どんどんいい写真を撮ってください。きっとそこには素晴らしい風景、素敵な人たち、大切な昭和村がありますよ。

川延 安直（福島県立博物館）

写真家の
村越としやさんと
みんなでつくる
日召ホロホ村写真展

撮影：村越 としや











教育目標
健康で明るい子ども
進んで学習に励む子ども
種よく礼儀の美しい子ども
よく考えて実行の子ども
社会生活に貢献する子ども





村越 としや Murakoshi Toshiya

1980年福島県須賀川市生まれ。2006年以降故郷を被写体を選び、そこで過ごした自身の記憶をなぞるように継続的な撮影を行う。2011年の東日本大震災以降はより重点的に福島の撮影に取り組み、写真術を用いて風景の変化と矛盾、人々の視覚的な認識の違いなどを見出だそうとしている。主な個展に「uncertain」(新宿ニコンサロン、2009年)、「草をふむ音」(福島空港、2012年)、「火の粉は風に舞い上がる」(武蔵野市立吉祥寺美術館、2014年)など。これまでに多くの写真集を出版、2009年には自主ギャラリーを設立するなど、写真を発表する手段、場についても意識的である。日本写真協会賞新人賞(2011年)、さがみはら写真新人奨励賞(2015年)受賞。2013年から2017年にかけて福島県立博物館が事務局を務めて活動した文化による復興支援プロジェクト「はま・なか・あいづ文化連携プロジェクト」に2016年度に参加。須賀川市文化振興課と連携し須賀川市内の遺跡を撮影。土地の記憶を捉えた。

令和4年度アートによる新生ふくしま交流事業
アートで広げる子どもの未来プロジェクト 福島芸術計画 2022

写真家の村越としやさんとみんなで作る昭和村写真展

ワークショップ講師：村越としや（写真家）
大里正樹（福島県立博物館）
講師補助：佐藤好起、平野聖夜
写真展：会期 2022年11月27日（日）～12月18日（日）
会場 交流・観光拠点施設 喰丸小
主催：福島県
共催：昭和村教育委員会
企画：川延安直（福島県立博物館）
運営：小林めぐみ（福島県立博物館）、西尾祥子（福島県立博物館）
川延安直
事業受託者：認定特定非営利活動法人ドリームサポート福島

写真家の村越としやさんとみんなで作る昭和村写真展記録集

テキスト：川延安直
撮影：村越としや、川延安直、小林めぐみ
編集：小林めぐみ、西尾祥子、川延安直
デザイン：江畑芳

発行：福島県

この事業は、国内外からお寄せいただいた寄附金をもとに造成された 「福島県東日本大震災子ども支援基金」
により実施しています。

